

【2019 年度第 2 回特別講演会報告】

アイヌ歌謡教材化奮闘記

石田 久大 氏 (声楽家・元北海道教育大学教授)

北海道教育大学旭川校音楽科の科研費研究として取り組んだアイヌ歌謡の教材化は、小・中学校そして幼稚園において活用してもらえようなアイヌ歌謡の指導用・鑑賞用 DVD を制作することと、音楽科の学生達が近郊小学校の児童の前で公演するための、アイヌ伝承話による音楽劇を制作することの二つの作業を通して行われました。およそ 10 年の期間でしたが、この間に近文アイヌの皆さんから全面的なご協力を得ることが出来ました。今回の講演の目的は、お世話になった近文アイヌの人たちとの関わりについてご説明することであり、話の中ではアイヌの皆さんから頂いた貴重な言葉をお伝えするつもりでした。ところが、当日は学生達が一生懸命に取り組んで公演した音楽劇の一部を観てもらいたいとの思いから次第に時間が押してしまい、アイヌの人たちから頂いた貴重な言葉をお伝えする部分がすっかり抜け落ちてしまいました。ここでは、そのことも捕捉させて頂きたいと思います。

川村カ子トアイヌ記念館館長の川村兼一さんは、旭川校音楽科として制作した DVD の中で、「ク・リムセ 弓の舞」や、川村さんの子どもの頃の近文の様子をお話していただくインタビューに快く出演していただきました。テレビ等で拝見する川村さんは、遺骨返還問題などにおいて厳しい口調でお話しておられることがありますので、実際にお会いする前は正直なところコワカッタのです。しかし何度かお会いするうちにとても気さくで優しい方と分かるのですが、同様のことは大変お世話になった奥様の川村久恵さんにも、アイヌ文化伝承者の故杉村フサさんにも、また言語学者の太田満さんにも感じたものでした。それは畏敬にも似た感覚なのですが、適当な言葉を見いだすことが出来ません。おそらく私の中に、アイヌ民族そして異文化に対する心の構えのようなものがあつたのだと思います。しかしそれは最初の頃のことで、2 本の教材用 DVD の作成と 2 作品の音楽劇を完成するために、川村久恵さんをはじめとする近文アイヌの皆さんは本気で私たちと向き合っていて下さいました。

アイヌ歌謡については主に久恵さんから長い時間をかけて教えていただきましたが、フサさんからも度々指導してもらいました。フサさんは惜しくも平成 30 年に亡くなりましたが、アイヌ文化伝承者として最も重要な存在であった杉村キナラブックの三女にあたります。講演では、私がフサさんから口伝で歌謡を教わっている様子を聴いて頂きました。今振り返るとこのことはまたとない経験であり、その録音は貴重な記録にもなり得るのだと思います。アイヌ歌謡の教材化に着手し始めた頃、教材化という名目とはいえアイヌ民族ではない者がアイヌ歌謡を安易に扱うことは、文化の盗用と同じことなのではないかという迷いに、フサさんは「あんたのような学校の教員という立場の者が、今の子どもたちにアイヌ歌謡を伝えていってくれなきゃだめよ」と言ってくれたことは、その後の活動の大きな弾みとなるうれしい一言でした。

教育大学旭川校でアイヌ語の講座を担当されている言語学者の太田満さんは、音楽劇の台本作りや DVD の解説書づくりの相談のために実に多くの時間を割いてくれました。台

本の一語一語まで吟味して頂き、また演出上においてはアイヌ民族の考え方や作法などについて細かなアドバイスをいただきました。当日一部分を見ていただいた音楽劇「シマフクロウの伝言」の終幕合唱の台詞づくりに行き詰っていた私に、太田さんは「自分の祖先のことを知らずして道産子として生まれそして育った者は、アイヌ文化を自分たちの故郷の文化と考えてくれりゃいい。それが共存だよ」と言われたことがあります。アイヌの人達の誰もがそのように考えてくれる訳ではないと思いますが、アイヌの題材を用いた音楽劇の台本を書くことの緊張を和らげてくれた言葉でした。北海道に生まれ育った者であっても、アイヌ文化を深く理解しようとするには、北海道の歴史や文化についてそれまでとは異なった角度から学びなおすことに他なりません。アイヌ伝承話の音楽劇を観た子どもたちが、いつの日か北海道を新たな視座から見つめなおすことにより、アイヌ文化への興味と郷土愛を持ってもらえれば、音楽劇の制作者として大変うれしいことです。

アイヌ歌謡の中で、特に興味を惹かれるのはウコウクです。ウコウクは数人で演奏されますが、比較的短い歌謡をお互いに一拍ずつずれながら数回繰り返した後、停止することなく他の曲へ移り変わりながら進められる歌唱形式です。これは世界的にもあまり例を見ないもので、淀みなく演奏するためには相応の歌い込みが必要とされます。数人でお互いに一拍ずつずれて歌うため、隣の人々の歌につられてしまうというゲーム性もあり、そのことが子どもたちにとって楽しい音楽教材になると思われます。

ウコウクの古い録音には、昭和10年代の久保寺逸彦による採集のものと、昭和40年代にNHKによって大掛かりに採集されたものがありますが、それらは当時の歌の名人たちによる貴重な記録です。しかしながら初めてウコウクを聴く人にとっては、何かおどろおどろしいような感じを受けるのですが、それは当時の名人たちの音色に要因があるようです。音色については、保存会の中にも昔と現在の音質の違いに関心を持たれ、かつてのフチたちの音色に近づける試みをされている方もいます。声楽的には声門の使い方が現在の演奏とは異なるのですが、そのことにはアイヌ語本来の音声とも関係しているのではないかと考えられます。このおどろおどろしさとは反対に、ウコウクを五線譜におこし西洋的な音程感覚と発声で演奏すると、現在の我々にも幻想的で心地よいと感じられる音色になります。音楽劇で演奏されたウコウクは、学生達により意識的に西洋的に演奏されました。しかし、このことは音楽教科教育として授業を組み立てる場合の、難しい問題を提起します。アイヌ文化に限らず伝統文化を教材化する場合、児童・生徒に正確な知識と情報を伝え、興味と関心を引き出さなくてはなりません。教える側にとって都合よく美化することもデフォルメすることも避けなければなりません。児童・生徒がウコウクに興味をもって歌うようになるためには、最初に聴かせるのは昔のフチたちの歌声か、学生たちが西洋的に演奏したものか、あるいは現代的な音の装いで魅力ある歌声の団体マレウレウなのという、いわゆる伝統音楽を教材化してゆく上での微妙な課題が潜んでいます。

60歳代も半ばを過ぎると、出会いの不思議さやその意味を強く感じるようになります。甲地利恵さんとの出会いは、旭川校のアイヌ歌謡教材化の活動にとって非常に重要な出会いであり、作業の様々な場面において貴重な知識と助言を頂きました。さらに今回は北海道民俗学会の方たちとのご縁もつくって頂きました。講演のお話をいただいた時は、私は北海道民俗学会なるものがコワカッタのですが、皆さんにお会いしてみると、それぞれの専門を尊重しながらの学会活動は大変興味深いものと感じられました。現在は、旭川市民

の手による音楽劇を公演するための計画を立案中ですが、お世話になった方々のご縁を大切に活かしてゆきたいものです。